

SHOW HEY シネマルーム



Data

監督・脚本：石井裕也
出演：満島ひかり / 遠藤雅 / 志賀廣太郎 / 岩松了 / 相原綺羅 / 菅間勇 / 稲川実代子 / 猪股俊明 / 鈴木なつみ

👁️👁️ みどころ

PFFスカラシップからまた名作が誕生！タイトルも奇妙だが、天下の美女満島ひかりのキャラもかなりヘン。しかし、今はこんなヒロインが面白い！

前半のキーワードは「しょうがない」と「中の下」だが、後半のそれは「開き直り」と今ドキ禁句とされている「頑張る！」。面白いストーリーを堪能するとともに、佐和子と同世代の君たちこそ本作を観て感動を共有すべきでは？

* * * * *

今年のPFFスカラシップ作品の出来映えは？

1977年にスタートした「ぴあフィルムフェスティバル(PFF)」は園子温、矢口史靖、荻上直子らの才能を発掘し続けてきた。昨年は、理学部数学科卒の27歳、内藤隆嗣監督の『不灯港』(08年)が第18回PFFスカラシップを獲得したが、こりゃめちゃ面白い映画だった(『シネマルーム23』217頁参照)。それに続く第19回PFFスカラシップ作品が本作だ。

石井裕也監督は1983年生まれだから、内藤監督と同じ27歳で、商業映画を監督するのは今回がはじめてとのこと。さて、彼は本作でどんな才能を？本作の出来映えは？

主演女優に注目！

本作の主演は、『愛のむきだし』(08年)で一躍若手女優のトップランナーに躍り出た満島ひかり。キネマ旬報5月上旬号では「こんにちは 満島ひかりです」と題する22頁の巻頭特集が組まれるほどの、現在最も注目される若手女優だ。もっとも、チラシに写る彼女の写真は白い帽子、白い作業着のしじみ採り作業員の制服だから、お世辞にも美人と

は思えない。石井監督は本来絶世の美女である満島ひかりに、なぜこんな服装を？それは本作のちょっと奇妙なタイトルと密接な関係があるから、あなた自身の目でしっかり確認を。こんな女優を、そしてこんな名作を見逃したら、ソンソン。

今は、こんなヒロインが面白い！

本作が面白いのは、満島ひかり演ずるヒロイン像がこれまでの映画にないユニークなものだということ。冒頭に示されるヒロイン・木村佐和子（満島ひかり）の人物像は 上京して5年目のOL、5つ目の職場、5人目の彼氏である職場の上司・新井健一（遠藤雅）と付き合っているストレスまみれの女というもの。しかも、健一は5歳の一人娘・加代子（相原綺羅）がいる子連れだ。ストーリーが展開するにつれてわかってくるのは、佐和子が故郷でしじみ工場を経営する父親の元を飛び出したのは「駆け落ち」らしいこと。そして、その後も次々と男に捨てられたこと。5番目の男が子連れでセーター編みが趣味という変なヤツだから、人間はいったん転がり始めると坂道を転がるようにどんどん落ちていくのだと実感。しかして、今はこんなヒロインが面白い！

キーワードは「しょうがない」と「中の下」

本作をみてはじめて知ったのは、「腸内清浄」。これによって身体の中に溜まっているストレスがすべて洗い流されるというのは真っ赤なウソだが、なぜ佐和子はこんな治療を受け続けているの？玩具を製造している佐和子の会社における女子社員たちの井戸端会議をみていると、職場自体が腐り切っていることがよくわかる。

そんな職場と前述のような男関係の中で毎日を生きている佐和子のキーワードは、「しょうがない」と「中の下」。「しょうがない」は今ドキの若者共通のキーワード(?)だが、「中の下」とはいかにも面白い。私たち団塊の世代が日本の将来を担っていた頃は「一億総中流意識」が日本上昇の原動力だったが、佐和子の言う「中の下」とは一体どんなイメージ？政府は2010年5月10日、中国から日本に来る旅行者を増やすため、現在は年収25万円（約340万円）などの要件を設け、富裕層に限定していた個人観光ビザを、7月1日から中間層も取得できるよう緩和する方針を固めた。中国の中間層とは年収が約3万～5万円（41～68万円）の層だが、その人数は約4億人以上もいるらしい。そんな中国の中間層はあくまで上昇志向だが、佐和子の言う「中の下」はあきらめ志向。そんな彼女の、人生の転機となったものとは？それは、映画の後半でじっくりと。

どこまで落ちるの？

駆け落ち(?)に失敗した佐和子がスナナリ故郷へ戻れなかったのは当然だが、東京での一人暮らしは好転することなく、夢も希望もないストレスまみれの生活が日常となっていた。そんな佐和子が再び父親・忠男（志賀廣太郎）が経営するしじみ工場、木村水産に

戻ったのは、忠男が病に倒れたため。つまり、否応なく一人娘の佐和子が社長業を引き継がなければならなくなったわけだ。しかし、突然駆け落ち娘が戻ってきたうえ、「これから私が社長です」と宣言されても、しじみ採りの実戦部隊である塩田敏子（稲川実代子）たちおばさん軍団が率直に従えないのは当然。少しでも佐和子を支えたのは、経理の遠藤（菅間勇）くらいだった。しかも、自分の彼氏を佐和子に奪われて駆け落ちされてしまった同級生の村岡友美（鈴木なつみ）も表面上はともかく内実はえらく佐和子に反抗的で、腹いせに健一にモーションをかけてきたから一混乱起きること必至。こんな風に、故郷に戻っても針のむしろ状態だったから、これでは佐和子は落ち込むばかり。一体どこまで落ちていくの？そして、木村水産は倒産へ一直線？

「開き直り」って悪いこと？「頑張り」って禁句？

本作では毎晩缶ビールを手放せない佐和子の姿が印象的だが、遠藤から会社倒産の危機と伝えられた時が佐和子のどん底だったようで、この頃の酒量はハンパではない。しかも、この時点では「私も東京に行きたい」という友美にたぶらかされた（？）健一が加代子を残して東京に行ってしまったから、佐和子は加代子の母親役までこなしていた。そんな佐和子がある夜自宅療養中の父親の前に「あたし、あの人と結婚するから」「所詮、あたしなんてたいした人間じゃないからさ・・・だから頑張るよ」と宣言するシーンが本作のハイライト。なぜなら、これを境目として佐和子の人生が大きく切り替わっていったから。ここで大切なことは、なぜ佐和子がこのように方向転換することができたのかということだが、私が思うにそれは「開き直り」。この言葉は普通良くないイメージで使われるが、それはなぜ？「開き直り」って悪いこと？

また、何ゴトにもやさしい今の教育論、子育て論では「頑張り」という言葉は禁句らしいが、本作後半は佐和子が叫ぶ「頑張る！」がキーワード。突然おばさん軍団に向かって「私なんて所詮、中の下の女ですから！」「逆に中の下じゃない人生送ってる人なんているんですか！？」「何回男に捨てられても、私は頑張りますからね！もう頑張るしかないんですから！」と叫ぶ姿は「開き直り」そのものだ。しかし「開き直り」と「頑張る」が一致すれば「中の下」の人間でも大きなパワーとなり、人生を転回させることができるのでは？

「社歌」を変えれば・・・

本作に登場する人物は、ヒロインの佐和子はもちろん子連れ彼の彼氏・健一も、健一を誘惑する友美もそしておばさん軍団の面々も、個性豊かというよりちょっとヘンな人物ばかり。病に倒れた忠男だって、佐和子が子供の頃に浮気現場を発見されたのをはじめとして、かなりの社内「武勇伝」があったことが彼の死後明らかになるから、相当なもの。ところが、これらが決して石井監督が奇をてらって作り出したキャラクターではなく、それぞれの人間が本質的にもっているものだから、本作はすばらしい。コメディ風の展開も随所

にみられるが、それも決して今ドキのアホバカバラエティーのように笑いを誘うことを目的としたものではないところが面白い。

その典型が遠藤のリードで社歌を歌うシーン。大企業ならともかく、今ドキ社歌を持ち毎日それを歌っている零細企業なんてどこにもないだろうが、田舎の零細企業、木村水産にはまだそんな社歌があるらしい。もっとも、佐和子が戻ってきた際に歌われたその曲は、どんなド素人が作詞作曲したのか知らないがかなりひどいもの。しかして「頑張る宣言」をした佐和子が、社内に意識革命を起こすべく最初に目をつけたのが社歌の改正。世の中は不景気一色だが、開き直れば大丈夫。佐和子が作詞した新社歌の「来るなら来てみる大不況 その時や政府を倒すまで 倒せ倒せ政府」や「一度や二度の失敗と駆け落ちぐらいは屁の河童」などのフレーズをみれば、「開き直り」がいかに徹底しているかがよくわかる。憲法改正に向けた議論が全く進化しないまま、政治的、経済的な衰退を続けているニッポン国も、木村水産が社歌を変えれば元気になったように、本気で憲法を改正すれば元気になるのでは？

遺骨投げシーンと絶叫シーンに注目！

最近某人物のお葬式に参列した時なぜか考えたのが、私が死んだ後の葬式や遺骨、お墓のこと。それまでそういう方面に無頓着だった私だが、家族会議を開いているいろいろ相談したのはやっぱり年のせい？それはともかく、本作ではラストに死亡した忠男の遺骨の処理をめぐるすごいシーンが登場する。

戴思杰（ダイ・シージエ）監督の中国映画『中国の植物学者の娘たち』（05年）は、父親殺しによって死刑判決を受けた実の娘ミンが、「あなた以外は誰も愛さない」と誓ったアンの遺灰と合わせて湖に撒いて下さい、と書いた遺言どおりの美しい映像でジ・エンドとなった（『シネマルーム17』442頁参照）それと同じように（？）しじみ採りを一生の仕事とした忠男の遺言（？）も遺骨をしじみの住む川に撒いてくれということだったらいい。そこで今日佐和子は、おばさん軍団を引きつれて父親の遺骨を川に撒こうとやってきたのだが、そこに登場したのが健一。友美との東京での生活がうまくいけなくなり、再び加代子と佐和子が生活しているこのクソ田舎に戻ってきたわけだ。そんな健一に対して壺の中に入った父親の遺骨を投げつけながら、ぶちまけた佐和子の思いとは？最後に注目すべきは、天下の美女・満島ひかりが目を細めながら「お父さん」と絶叫するクローズアップのシーン。これが生半可な絶叫でないところがすごい。さすが幼少の頃から沖縄アクターズスクールに在籍し、7人組ユニット“Folder”（後“Folder5”）で活躍していただけたことはある声量にビックリ。これは永久に残る本作の、そして満島ひかりの名シーンになるのでは？

2010（平成22）年5月14日記

表紙撮影の舞台裏(13) 表表紙は？

1) シネマ23、シネマ24に続いて、シネマ25の表紙も中国旅行での一コマが飾ることになった。表表紙は2010年3月13日～18日までの大連・威海・青島旅行のもので、3月15日に威海の定遠艦景区の入口で撮影した2枚の写真だ。大連では、丸1日かけて日露戦争ゆかりの東鶏冠山景区、白玉山、203高地を見学したが、威海では？まず下の写真に注目。これは定遠艦景区の入り口だが、その電光掲示板には「熱烈歓迎迎坂和章平先生、毛丹青先生一行様」という文字がずっと流れていた。写真はその一瞬を切り取ったもの。これを見れば、その熱烈歓迎ぶりがわかるはずだ。

2)そして、上の写真は定遠艦景区が04年に5000万元(約70億円)をかけて復元した定遠の実物大のレプリカの艦尾で撮ったもの。定遠艦景区は年間60万人が訪れる一大テーマパーク。その中心が日清戦争当時の清国北洋艦隊の旗艦であった定遠号のレプリカで、内部は定遠艦歴史展館になっている。定遠号は全長94.5m、全幅18.4m、満載排水量7333トンの巨艦で、当時の定遠とその姉妹艦・鎮遠はいわば後に日本が世界に誇った7万2千トンの巨艦・戦艦大和と武蔵のようなものだ。艦上には305mmの主砲、150mmの副砲、57mmの速射機関砲、そして3隻の魚雷艇やボートなどが装備されて

いる。目に付く高いマストと2本の煙突に注目したい。09年11～12月に放映されたNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』では、定遠号の主砲に洗濯物を干している姿が写し出され、これを見た東郷平八郎が、「艦は立派だが、兵の士気は低い」と見抜いたエピソードが紹介されていたが、今まさにその巨大な主砲が実物そのものの迫力で目の前に。

3)かつては威海衛(いかいえい)と呼ばれていた威海は山東半島の最東部にある人口約250万人の都市で、渤海を隔てて北側の大連・旅順に面している。日露戦争では、連合艦隊先任参謀・秋山真之が立案したT字戦法によって完膚なきまでにロシアのバルチック艦隊を撃破した「日本海海戦」が有名だが、日清戦争では黄海海戦と威海衛の戦いが有名。威海衛は清末には李鴻章率いる清国北洋海軍の基地とされており、日清戦争においては丁汝昌率いる清国北洋艦隊が黄海海戦の敗戦後、閉じこもったのがその威海衛の軍港だ。したがって、威海のまちには定遠号と定遠艦景区がいかにピッタリ。

4)そんな威海になぜ「熱烈歓迎」されながら私が毛丹青先生と一緒に行くことになったのか。それは、いずれ時期をみて明らかにしたいが、そのためには日中友好が何よりも大切なことを肝に命じておきたい。

2010(平成22)年10月28日記